令和６年度　第１回岐阜県人権懇話会　議事録（概要）

日　時：令和７年１月３０日（木）１０：００～１１：２０
会　場：岐阜県庁３階　３０２－３０４会議室

（委員）
SNS の人権については、国などにおいてどのように対応していくのか、これからいろいろと研究されるのだろうが、SNS による人権侵害は私たちも無意識のうちに加担するかも分からない。
また、1995 年に北京で世界女性会議が行われてから 30 年。そのときは、女性の権利は人権であるということが、大会宣言の大きな柱、中心課題だったと思う。世界中の戦争で女性やこどもへの暴力が行われていることを見ると、今の子どもたちに世界人権宣言をどのように教えていくのか、大変難しい議題であると感じている。改めて、人権教育、人権意識の重大さをどのように根差させていくのかが重要だと考えた。県独自の施策ができないかと感じる。

（委員）
日本はインクルーシブ教育が、まだ不足している。発達障がいを持った方とそうでない方をどうやって一緒に教育していくのか、先生の中にも一緒にやっていくという気持ちはあっても、十分慣れておらず、まだまだだと思う。インクルーシブ教育に関して、猜疑的な考えをお持ちの方も一定程度おられるので、保護者、教職員、行政、教育委員、全員が同じテーブルについて、どうしていくのか、考えなければならない。一部には、小中一貫校など積極的にいろいろと行われており、そういう学校に行くと、先生が本当に情熱を持って取り組んでいて、生徒も生き生きとしている。
発達障がいの子が増えているような統計データになっているが、発達障がいをより一層きめ細かく診断するようになったことで、そういうカテゴリーに入ってしまう子が多くなったのではないか。インクルーシブ教育を適切なものにしていくことが大きな課題だと思っている。
感染症専門医の立場から、コロナも５類になって、ウイルスが弱毒化したと言う方もいるが、感染が広がって免疫を持ったということではないか。また新しい感染症が出てくれば同じことで、その直後にはかかりたくない、怖いという思いから、かかった人の人権を無視したような発言や行動を繰り返すと思う。
私は専門がワクチンで、ワクチンをずっと推進している。ワクチン反対派の方が彼らなりに情報を十分収集した上で、自分は打ちたくないという決定をされたことに関して、私は否定や批判をするものではない。ワクチンを打たないと決めた方も、ワクチンを推進する人を否定したり批判したりせず、お互いを尊重することが重要だと常々考えている。講演では、最初にいつもそう言うようにしている。

（委員）
最近、地域における希薄化を実感している。孤独・孤立について、県や内閣府ではプラットフォームの充実を言っていたと思うが、ただ言われているだけで、実際の地域においてはあまり充実されていない。私の地域では縁側コミュニティーや高齢者のサロンを前からも行っているが、行政にはもう少し何か具体的に考えていただくとありがたいと思っている。地域での活動を充実する方に支援をいただきたい。
先程、様々な人権について説明を聞いたが、子どもの人権のところで、ヤングケアラーについて一言も出てきていなかった。家庭のいろんな事情があって外に出せなくなっていて、外に出したら嫌な思いをする、いじめにあうということが起きると思う。経済的にも生活困窮していて、外に言えないという環境がある。それに対しての施策がなされていないのではないかと最近思っている。

（委員）
障がい者の人権について。昨年 12 月に県立高校で授業参観に参加した。その授業は、視覚障がいのある方の日常の生活、思いについて理解するもので、これからの自分の生き方に活かすことがねらい。授業では、最初に視覚障がいのある方にお話を伺って、その後に自分たちで体験する。生徒２人がペアになり、１人はアイマスクをして、もう１人が介助者になって、実際に自分たちの学校の校庭や廊下、階段を歩く。すぐ目の前に何があるのか分からないので非常に不安である、階段の上り下りに非常に怖い思いをした、介助者では、瞬時にどういうアドバイスをしたらいいのか非常に難しかったという感想があった。実際に自分たちで体験をしていくことが、本当に理解していくことに繋がるし、これからの生き方にも非常に役立つのではないかと思う。人権教育協議会では「知る」、「自分自身を見つめる」、特に「行動力」を大切にしている。

（委員）
同和問題、部落差別問題と言っても、なかなか難しく、初めて聞く人が多いというのが実情である。毎年、市役所の新入職員に対して、私から説明するが、学校で人権問題の一つとしてやってきただけなので、詳しく知らないことが多い。繰り返しやっていくことが重要だと思っている。

（委員）
視覚障がいの方たちから、他の人たちと普通に交流したい、パラリンピックがあったように一緒にできるゲームがあったら一緒にやってみたい、という希望を聞いた。
人権は聞いて頭で分かっただけでは腑に落ちない。自分で見つけて、自分で感じると初めて自分のものになる。
女性も高齢者も子どもも集まって、人権を考える場が必要ではないかと感じている。

（委員）
　日常生活をしている中で、人と人との交流が大変少なくなってきた。特にコロナ以来、顕著だと思うが、人と人との交流の中から、お互いの人を思いやる、人を尊重する、人権を大事することに繋がっていくと思うが、日常社会におけるいろんな人との交流がどんどん希薄になっており、それを恐ろしく感じるようになった。人権問題が言われて何十年も経っているが、まだまだ定着していかないことに現代の不安を感じる。
　できるだけ地域での触れ合いを進めるようにしているが、行政や各種団体の地域での活動がもっと薄く広く広がっていくことが大事だと思っている。特に行政にもそのことを意識する中で、指針の広めをお願いしたい。

（委員）
　小中一貫校へ見学に行ったとき、小学１年生、２年生の子に中３の子が算数を教えていた。お兄ちゃん、お姉ちゃんが教えることをとても真剣に聞いており、一生懸命勉強していた。私はとても感心した。そのような様子を見たとき、いじめなんてとても考えられない、そんな印象を受けた。

（委員）
　インターネットの人権侵害について、昨今、国家的規模で SNS を規制する事例がある。いじめ防止対策推進法では、定義の中にインターネットを含むと書いてある。利便性のためだけに保護者がスマホを与えて、いじめがあったら学校に言うという悪循環になっていることから、何か規制をする必要があると思う。スマホは匿名性もあるし、いじめは連鎖していく。小・中学校が個々で対応しても限界がある。県独自で SNS 規制をやらないと、いじめはいつまで経ってもなくならないと思う。もうそろそろ、県独自の指針を出すことも必要だ。
　もう１点、男女共同参画と言っているが、岐阜県で女性の管理職は何％いるのか、何％を目指してやっていくのか、なかなか見えづらい。しっかり目標を立てて、もう少し具体化されたうえでやっていけばいいのではないか。

（委員）
　男女共同参画についてはプランがあり、令和８年４月１日時点の県の女性管理職の割合を 25％、女性の課長補佐・係長級の割合を 30％とすることを目標としている。令和６年４月１日時点の県の女性の管理職比率は 23％であった。

（委員）
　人権週間に「「誰か」のことじゃない。」というキャッチコピーのもと「人権啓発フェスティバル in ぎふ」など様々な啓発活動を行った。

また、中学生人権作文コンテストでは、県内で１万点弱の応募があり、そのうちの１点が人権擁護局長賞を受賞した。
その他に、こどもの人権 SOS ミニレターや LINE じんけん相談のほか、昨年９月からはチャットによる人権相談などの活動も行っている。

（委員）
先ほど、言論の自由という話があったが、他人ごとではないということで、職員を含めて、話し合っているところ。人権を侵害しないようにできることを日頃から考えている。
社内の若手の人権を守るという点でいうと、日頃からコミュニケーションをとり、何でも相談し合えるような会社にしていかなければならないと考えている。

（委員）
最近、500 人規模の子どもが自ら命を絶っているという新聞記事を読んで、これは大変なことではないかと感じた。誰がこの責任を取るのか、誰も取らない。いのち生き合うというのが私のテーマで、いのちは生き合う、生き合う中で力をもらっているというのが私のメッセージだが、500 人を超える子どもが命を絶つような現状が、自分たちの生まれ育った国で起こっている。人権どころの騒ぎではない、人間の命の問題として起きている。行政だけの問題ではない、ここにいる委員の私たち一人ひとりが問われている。是非とも今日委員が述べられた意見や感想を県職員の皆さんはしっかりと受け止めてほしい。